

【エッセイ】

この夏、私の祖父が倒れ、介護が必要になった。祖父が倒れることは三回目、しかし、入院は初めてだった。そして、今回は初めて私の目の前で倒れた。幸い、場所が病院だったこと、周りに多くの人が居たお陰で、祖父はすぐに運ばれていった。しかし、私は戸惑うばかりで何一つ行動することができなかった。高校で三年間福祉を学んでいた私は、自分ならすぐに行動できると思っていた。しかし、現実で起こったことを受け止めきれず、声をかけることもできなかった。ベッドで眠る祖父を見て、すごく心が痛くなった。どうして声をかけることができなかったのだろう、もしかしたら朝、顔を見た時に気付く事が出来たのではないか、などと考えた。病院へ来た母と祖母を見て、申し訳ないという気持ちで思わず泣いてしまった。母は、あんたのせいじゃないよ。と、笑っていたが、頭が真っ白になって行動することが出来なかったと伝えると、祖母は寂しそうに笑って、誰だってそうだよ。今回は病院で良かったけど、次があったらすぐに助けてね。と、言った。私はやっとそこで気付く事があった。祖父にも私にも これから があるということだ。祖父は退院してからのこれからがあるし、私は祖父を支えるこれからがある。

私たちは、これから介護という問題と向き合わなくてはならない。祖母一人が抱えることではないし、施設へ預ければ良いということでもない。家族の支え合いが必要なのだ。そこで私は自分には何が出来るかを考えた。考えてもなかなか答えが出ずに、祖父は退院し、家に帰ってきた。

祖父が帰ってきてからの家族の祖父への接し方に違和感を覚えた。食事もできる、杖を使って歩ける、会話もできる。しかし、どうして祖父が悪い病気にでもなったかのように接するのだろうと思った。そして、私の仕事は祖父へ日常を届けることだとわかった。学校であった出来事、面白かったテレビの話、友達と買い物に行き、お金が足りず、服が買えなかったこと、細かいことまでずっと喋っていた。入院する前と変わらずに。夏休みが終わる頃には祖父に笑顔が増えた。それからは家族も普通に接するようになり、以前のような普通の家庭に戻った。

私は、この夏に自分には何が出来るだろうと初めて考える機会があった。そこで、私は人に日常を届けることが出来ると思った。これからは介護も必要で大変なことも多いと思うが、家族にいつもの日常を届けられるようにしたい。